みんぱくリボジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnol

いかにして民族誌映画はつくられたか:映像による民族誌の試み(特集:新しい民族学・応用の人類学④)

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2015-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 池谷, 和信
	メールアドレス:
	所属:
LIRI	http://hdl.handle.net/10502/5670

この特集の最後、第4回目は「映 像」についてです。われわれがある 民族の生活を知ろうとするとき、 として、文字という手段によるより も、映像の方が強い印象を受けるこ とがあります。

ここでは、映像制作における民族 学の関わり方について考えます。

映像人類学とは何であるのか?

がり、私たちはカラハリに住む人々が 取材をしていた。 日中には四十度近くになる9月の昼さ つくる野生スイカの貯蔵庫についての アフリカ南部に広がるカラハリ砂漠。

を守るためフワフワの毛でおおわれた を肩にかけ、音声担当者は、風から音 まわり小さくしたスイカが、三百個近 カメラマンは重さ十キロ余りのカメラ くも集められている。テレビクルーの そこには、わが国の栽培スイカを一

たちは撮影を休止した。 くる。ディレクターは、その犬を払い 果肉を灰でとかした水を使った子供の うとした。また別の時には、スイカの ける。するとディレクターが、カメラ いた犬の動きこそが事実としての意味 は、腐っているスイカや、のどのかわ のけようとした。いずれの場合も、 行水の撮影中に、犬が残り水を飲みに の先の数個の腐ったスイカをとり除こ マイクを手にして、それをスイカに向 乾季の真っただ中であるこの時期に

別にこ 族誌映画はつくられたか 映像による民族誌の試み が応用の人数 池は

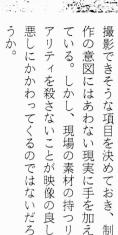
和ず

北海道大学) 信ぶ



スライスした栽培スイカを 鍋の中で煮込む所の撮影。

野生スイカの貯蔵庫からスイ カをとりだす夫婦。これらの スイカはロバの背にのせら れて、キャンプに運ばれる。



を持つ。にもかかわらず、

民族誌映画の作成と利用が重要な課題 になっている。 の社会に関する文化的現象を記録した 性から生まれてきたために、 けられている。それは、 は少ないが、一九七三年九月にシカゴ わが国では今だに、この分野の専門家 映像を活用する人類学の のつけ方であり、 する文化を正確に記録することの必要 ける重要な研究テーマの一つに位置付 会議において、この分野は人類学にお で開かれた第九回国際人類学・民族学 コンピュータ人類学」と同様な名称 映像人類学は、 ビデオや写真などの 前号で紹介され 消え去ろうと 一分野である ある特定

P.編 1973)。その中で彼は、映像を撮らしい世界旅行」シリーズなどのテレー氏(現、日本映像記録センター)が、一氏(現、日本映像記録センター)が、「テレビ報道にとっての映像人類学」らしい世界旅行」シリーズなどのテレらしい世界旅行」シリーズなどのテレらしい世界旅行」シリーズなどのテレ

は無理と考えており、どうにかならな

かと思い、

私が撮影したビデオを一

技術では調査地の映像記録を残すこと

私はかねてから、自分のカメラ

にはないだろ 現在でも傾聴に値する主張をしている。 深材の持つリ 作の方法を明示すること、被写体の人 深材の持つリ 作の方法を明示すること、被写体の人 でもして、「仮説の枠からは あらかじめ る側の心得として、「仮説の枠からは

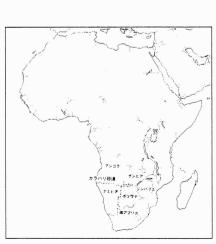
とは、 と栽培の両スイカを軸にその地域の民 として位置付いている。 か。 いってよい。 による民族誌 族誌を書いている私にとっては、 監修をしている今回の作品は、 通していると思っている。 を追求しているという点では両者は共 にとってはテレビ・ドキュメンタリー (画等で放映されるドキュメンタリー それでは、民族誌映画と、テレビや 私は、 いったいどこが違うのであろう 制作者の意図を通して事実 の作成の試みであると しかし、 例えば私が N H K 野生

かにして民族誌映画を制作したか?

まず、映画の方向性づくりの段階が編集の三つの段階に分かれる。性づくり、取材(フィールドワーク)性がより、取材(フィールドワーク)民族誌映画の制作は、私たちが民族

きた。 るからである。 いうレッテルをはってしまう恐れがあ ジからすると、 が国におけるアフリカの一般的イメ るという条件で承諾した。それは、 ものではなく、 化を探して、 た人々の生活を取材したいと依頼して を見たディレクターが、スイカからみ 十本近くNHKに提供していた。それ いよいよ取材の開始である。 私は、 過去の復元を目的とする 地域の中から古い形の文 秘境での水なし生活と 現在をありのままに撮 メ わ

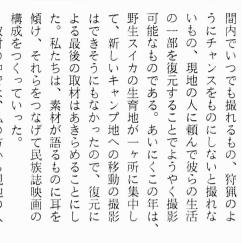
考えた。スイカ料理の状況のように期が次の三つから構成されるであろうとが次の三つから構成されるであろうとが次の三つから構成されるであろうとがでの三つから構成されるであろうといよいよいがは、私以外にカメラマン、音声担バーは、私以外にカメラマン、音声担バーは、私以外にカメラマン、音声担バーは、私以外にカメラマン、音声担がよいよいよいは、





現地の人といっしょにテン の中で撮影された映像を 彼らにとっての 映像の役割の追求が、私た ちに求められている。左手 前が筆者。

撮影隊のキャンプが現地の



みぬいて、 れたりする。 み込む。なれてくると、 うにはやってくれないので、 を誘導する場合がある。 カを手渡しするスイカダンスや踊りの 人にどうにかやってくれるように頼 取材の中では、 材を計画している。しかし、 現地の人が進んでやってく 私の方から現 例えば、 撮る側の心を 踊り手の 思うよ 地 スイ の

がきかないし、 ターに迷惑をかける。 は許されない。 合は、もう一度お願いするような失敗 を事前に訓練することが不可欠である。 て獲物を逃がしてしまうことは 、念な準備と、猟場でのすばやい動き しかし、狩猟の場面を映像にする場 猟の足手まといになっ 野生動物にはやり直し 取材チーム側

> ることがよくある。 して、村の生活誌として一般化してい の豊富な人を選んで、 考えると、私たちも聞きやすさや話題 の焦点はしぼられていく。 という。その人物が決まることで取材 を向けても平素と変わらない 住民の顔に自然な表情があり、 心となって登場する家族の選定である。 材中に私が最も驚いたことは、 聞きとり調査を しかしよく 人がいい カメラ 中

とである。 納得して、 なったタオルが目立った。 のため再訪したときには、 この取材のアセスメント と何とも奇妙な感じがした。 NHKのタオルを持っているかと思う 物を持たないキャンプの人々みんなが 名入りのタオルが大量に配られたので、 タバコなどを渡していく。そしてNHK 使っていたドラム缶、 御世話になった人から順に、 られる側への謝礼が支払われる。 て要は、私たちのものの分配に彼らが 取材中や終了後には、 不満が出ないようにするこ シャツ、 撮る側から撮 (影響調 お礼に関し ぼろぼろに 半年後に 私たちの 砂 最も 查

を四十四分にまとめなくてはならない。 をつなぎあわせる編集作業に入る。 取材が終了すると、 の場合は、二十五時間近くのテープ テープとテー プ

ずかしくならないように、 現場で苦労したものをはぶくことがむ 使って、しかもそれらの出所を明記 季に撮影したスイカの収穫の映像 したキャンプの移動を示す地図や、 立ってもらう。その一方で、 ない人を入れ、映像を見る人の立場に この段階では、 て、より完成度の高い作品に仕上げる つい情に走ってしま 現場を知ら 私が作成 雨

努力が必要になってくる。

プが、 、 ある。 る。 明するためのせりふになっているので ちらの質問が消され、 入っているのに気がつく。 現地の人々が平素は口にしない言葉が が一面に広がるのです」というような うことがありうるので注意が必要であ 映像の中では、「この辺りはスイカ また時には、つぎはぎしたテー 実在しない現象を創作してしま 彼らが現状を説 これは、こ

民族誌映画を作成する上での問 題

ない。 映画までも作成することは至難のわざ もいると思われる。 影技術や音声技術が身につくものでは と思われる。まして の私の経験からは、 かたわらビデオ撮影も併用している人 研究者の中にはフィールドワークの その一方で、 しかし、 研究者のラポア 一朝一夕には、 人の力で民族誌 いままで



空撮によって、平坦なカラハリの

る民族誌の構成を反映している。 今回の作品の構成では、 撮っていいのかわからないであろう。 持たれるだけではなく、いったい何を ておかなくてはならない。 うな事実を選択するかは、

、ラを構えては、

現地の人に不信感を

いきなりカ 事前に知っ

たらまったく違う形の構成になってい くいという点には注意する必要がある。 はそれらの文化要素は、 専門家の力が必要である。 るならば、 ので、その場面の撮影には力点がおか 業を対象にした研究を得意としている たと思う。私は、狩猟や牧畜などの牛 このため、 村での社会関係や言葉の分析をす 撮影準備も入念に立てられる。 社会人類学や言語人類学の 他の研究者が参加してい 映像になりに しかし、

> ペースに私たちがはまってしまうほど、 彼らの方が役者は上である。 れたりする。いつのまにか、彼らの 思い込んでいるが、彼らは私たちに慣 こしてもらったり、 しまった。 ないだろうか。 誌映画の方が現実に合っているのでは 者の相互関係をうまく描くような民族 れてくると思いがけない演出をしてく らとしては、自然な姿を撮影できたと お願いしたことに由来している。 るの意味)というあだ名を付けられて 「タウタウ」(現地の言葉で疲れさせ 今回の取材で、 私の誘導によって行動をお 私は村人の一人から 繰り返しの動きを むしろ両

接点があるのではないか。

民族誌映画は、

研究者による民族誌

上での、 であろう。

マスコミと研究者が協力する この辺に民族誌映画制作の

事実の中で、いかなるテーマでどのよ

いと思う。

ある地域に無限に存在する

を作成した後に作られることが望まし

らよいのかの適確な判断がつきにくい

で撮ったらよいのか、

何をお礼にした

きにしては、

何を、どのように、

の確立や異文化理解をぬ

今後のゆくえ

私が考えてい

記録する場合、 や環境問題を論じる一つの側面として ことの早いマスコミでは、 例えば、これらの状況変化を察知する チから把握せざるをえなくなっている。 文化と国民経済、文化と国家政策、 を描いても、 省略することなく、 向に影響を与える政治や経済の動きを 義が増大している。このため文化の動 市と農村などの枠組みで見ることの意 していない点に注意する必要があろう。 地球上の諸民族の文化を映像として 社会や地域の実像を反映 近年ではそれらの文化 学際的なアプロー 社会の動き

> らの映像人類学には、 な『やらせ』のため、テレビ・ドキュ 方で決まってくるといってもよい。 ティは、文字表現よりもすぐれた大き 映像の中にみられる事実の持つリアリ 態を描くことではないかと思われる。 動向への積極的な対応として文化の動 ではない。近代化と伝統文化のはざま 化を記録するという消極的な役割だけ とは、冒頭で述べたような消えゆく文 民族が取り扱われているにすぎない。 められているのではないだろうか。 チェックするような役割が社会から求 ている人々が多いと思われる。これか メンタリーの真実性に不信感をいだい 在では、マスコミで騒がれていたよう 良し悪しは、素材の選定とその生かし な魅力である。この点で民族誌映画の まっている現在、 にあって民族文化の自立性が崩れてし 映像人類学が現代社会になしうるこ 地球や国家レベルの それらを常に 現

ポール・ホッキングス、牛山純一編(一九七九): Hockings, P. ed. (1973): Principle Visual Anthropology Moulon & Co. 像人類学 日本映像記録センター。

材に基づいている。なお、この映像は「スイカ・砂漠の から四十四分間にわたりNHK総合テレビで放映された。 この報告は、 一九九三年九月の一ヵ月間にわたる現地取 一九九四年一月四日、夜十時